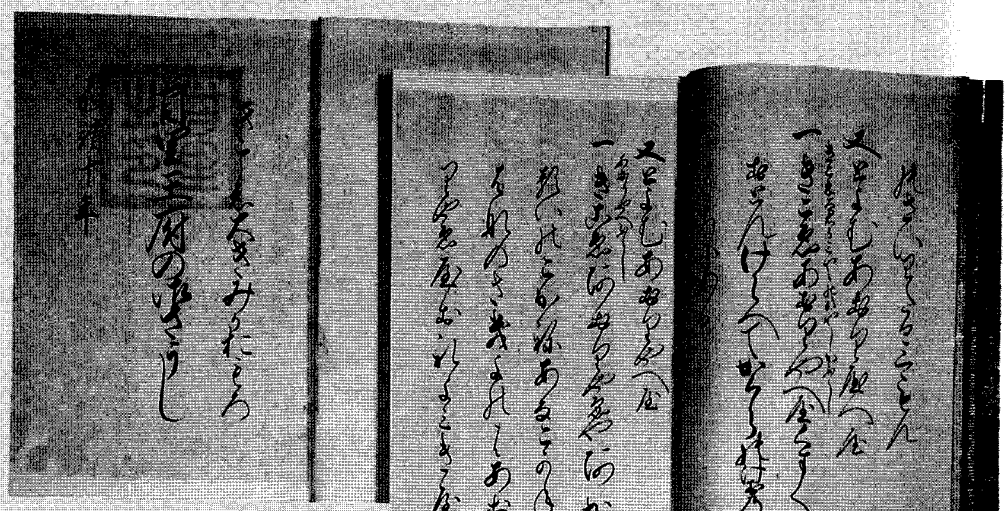
歌謡

1 歌謡概説
2 琉球の文学
3 口説
5 琉球の歌謡
6 八重山の歌謡



<おもろ草本『おもろさうし』>
沖縄県立博物館蔵

1 歌謡概説

文字を持たなかった私たちの祖先が作り上げた詩の世界が歌謡文学です。奄美・沖縄の歌謡を総称して「南島歌謡」と言っています。歌謡と言うと難しく聞こえるかもしれませんが、簡単に言えば「うた（歌）」のことで、民謡や神歌などを指しています。歌は詩と音楽が一体となったもので、この詩を歌詞、音楽を曲・旋律と呼んでいます。

「南島歌謡」の全体について内容から分類しますと、①呪祷的歌謡・叙事的歌謡・抒情的歌謡の三つになります。

呪祷的歌謡は、「祈りの文学」あるいは、「神と人間をつなぐ文学」の代表と言っても良いでしょう。まず、神から人間に下される神託、人間と、人間の営みに対する神の祝福の言葉がその第一です。また人間の神への祈りの言葉もその重要な分野です。さらに、生活の周辺で起こるいろいろな出来事を理想的な方向へ進展させるためのマジナイや呪いの言葉なども韻律を伴っており、呪祷的歌謡の範囲に入ります。科学が未発達で、神の力にすがるしか術の無かった先人達が言葉による救いとしてあみだしたのがこのジャンルです。祀りなどの宗教的儀礼の場で、神女などの特定の存在によって唱え、謡われました。ミセゼル・オタカベ・神口・願い口・②マジナイグトゥ・③ジンムヌ・④ウムイ・⑤クェーナそしてオモロなどがそれです。沖縄の文学を特徴づける重要なジャンルです。

叙事的歌謡は、歴史的な事柄や英雄的な人物の行為などをモチーフとして物語的に叙述していく歌謡です。形式的には、対語・対句を連ねて事件・事柄の発端から順序よく謡いついでいき、長大

---

① 呪祷＝神・仏に対する祈り、マジナイ・呪いなど。マジナイや呪いについては、ここでは言葉によるものに限って考えている。

② マジナイグトゥ＝マジナイのために発せられる呪詛の言葉。作品例は『久米仲里間切旧記』（一七〇三）に収録された、「まぜない言」の一例だけである。

③ ジンムヌ＝八重山地方に伝えられるマジナイの言葉。不吉な事象を見た時、天変地異に遭遇した時、ハブや魔物などの難を避けようとする時、身体の痛みを除去しようとする時などに使う。大体においてごく短い詞章であるが、竹富島には長い詞章のものもある。

④ ウムイ＝沖縄諸島各地の御嶽などの祭祀で謡われる神歌の一ジャンル。農作物の豊穣・航海の安全・神の守護の祈願など、村の人びと共通の願望、すなわち「思い」を謡う。

⑤ クェーナ＝稲作・造船・航海・築城・家屋建築・布織りから着物仕立てなど、さまざまな生産活動を叙事的に謡う。また雨乞いをテーマにしたものもある。

な詩章を形成するのが一般的です。このような作品は日本の文学の中では極めて少なく、『古事記』や『日本書紀』などの中に記された歌謡（記紀歌謡と呼んでいます）に若干みられるだけです。宮古島の狩俣集落に伝承された⑥ニーリ・⑦タービなどの、村の歴史を謡う歌謡は日本古典文学を代表する叙事文学というべきものです。沖縄諸島に伝えられた「大城グェーナ」は⑧グスクの造営を叙事的に謡ったものですし、「天親田」は稲作の過程を神の行為として謡い出すもので、いずれも叙事的歌謡の典型的な作品です。

叙事的歌謡は時代がくだるにつれてその題材の世界を広げて、普通の人間の社会生活を謡うようになります。これらの作品では宮古や八重山で起こった⑨新村建て、土木工事などの歴史的な事柄が謡われます。これらは伝説としても語られ、南島における歌謡と伝説の関係を考えるうえでも貴重です。また、⑩人頭税に苦しむ庶民の生活や男女の物語などを描いた作品も多数伝えられています。この意味でこのジャンルは「社会と人間をつなぐ文学」「共同の文学」と言って良いでしょう。奄美のナガレウタ、沖縄のウムイ・クェーナ・オモロ（一部）、宮古のニーリ・タービ・⑪ピャーシ・アーグ、八重山のジラバ・ユンタそして節歌の一部がこのジャンルに入ります。

抒情的歌謡は、個人の心の中に生起する喜怒哀楽をうたったものです。その意味で「人と人をつなぐ文学」「個人の文学」と言って良いでしょう。喜びにつけ、悲しみにつけ、人は歌をうたいます。私たちの祖先も自分の胸の内にある思いを相手に伝えるため歌をうたったのです。それは形式的には奄美・沖縄では琉歌、宮古ではトーガニ、八重山ではトゥバラーマという、三〇音から四〇音の短詩型の詞章の形となって現れました。また、多良間島や与那国島では琉歌形式の歌詞をベースにしたシュンカニ・スンカニなどの歌謡が伝来し愛唱され、今では島を代表する抒情的歌謡となりました。八重山では長詩型ですが三線と結びついた節歌も抒情的歌謡として生まれました。

このように「南島歌謡」は、古来の日本の文学の世界と対比すると、異彩を放っています。

---

⑥ ニーリ　宮古島狩俣・砂川・多良間島で祭祀に際に男女の神役によって謡われる。村の歴史を神の時代から謡い始め、英雄による村建て・交易・戦闘などを叙事的に謡うものや、神や英雄の事績を讃えるもの、雨乞いを謡うものなどがある。詞章は長大。ニーラアーグとも言うが、これは「ニール（楽土・ニライ）のアヤグ（歌）」が語源とされる。

⑦ タービ＝宮古島狩俣の夏の豊穣感謝祭に神女によって謡われる神歌の一ジャンル。村の歴史を神の時代から始めて、神による村建てなどを伝説的に謡うものや、村の英雄の事績を讃えるものなどがある。タービの語源は「崇べ」（神を崇め奉ること）。

⑧ グスク＝奄美から八重山にいたる各地にある石垣によって囲われた遺構。形態的には城郭タイプ、拝所タイプ、小集落タイプに分かれる。その数は二〇〇から三〇〇といわれる。建造が始まる時期は、十世紀から十二世紀ごろ。現在、世界遺産に登録されている巨大なグスクは十四世紀から十五世紀中頃までに築かれた。

⑨ 新村建て＝新しく村を創建すること。特に十八世紀以降の宮古・八重山で首里王府によって政策的に行われた。

⑩ 人頭税＝「にんとうぜい」または「じんとうぜい」と言う。税を一人一人、頭割りにして課税する方法で、古くから世界各地にみられた。沖縄の歴史では、薩摩の支配下に入った十七世紀中葉（一六五九）以降に宮古・八重山で施行された「定額人頭税」が有名。

⑪ ピャーシ＝宮古の神歌。豊穣のシンボルである神酒を神に捧げる儀礼の時に謡う。神の名を列挙し、豊穣を感謝する内容の歌。語源は「囃す・栄やす」が考えられる。

2　祈りの文学

ミセゼルは本来、神から人間に下される①託宣（たくせん）ですから、表現としては、常体表現で、命令の形を採るのが普通です。しかし、後代になると神と神をまつる存在（神女）の意識の混乱のために託宣と②祝詞（のりと）の区別が不明瞭となりました。教材のミセゼルでも、人間である国王の行為を神が敬語表現するなどの混乱がみられます。作品は少なく、約二十篇が収集されているだけです。

オタカベというのは、神を敬いあがめて人間の願いを聞きいれてくれるように祈る聖なる言葉のことです。その基本的な型は、まず祈願の対象である神に讃美の言葉で呼びかけ、次に、祈願を行う主体の表明が続きます。祈願者の自己紹介にあたる部分です。その後で祈願の内容が告げられます。まず、祈願の内容を直接的に言い、次に人間の願いが理想的な形で実現されるように表現して終わるのが普通です。最初の作品はその典型的な例ですが、その次の作品は祈願主体の表明が省略され、祈願内容の叙述も簡単になされています。

クチというのは、例えばウチナーグチ（沖縄語）、ヤマトゥグチ（大和語）などと使われるように、普通は言葉のことですが、文学の用語としては、聖なる言葉・呪力を持ったマジナイの言葉を指しています。神託を八重山では神口（カンフティ）、祈願の言葉を願い口（ニガイフティ）・飾り口（カザリンフティ）などと言うのがその良い例です。

このように呪祷的歌謡が生き生きと伝えられてきたのは、言葉には言葉の指し示すものを現実にもたらす不思議な力、すなわち言霊（ことだま）があると信じる精神があったからでしょう。

---

① 託宣＝神から人間に下される命令、祝福の言葉。神のお告げ。

② 祝詞＝神祀り・神事の時に発せられる、神に対する祈願の言葉。日本神道においては神主によって読み上げられる。

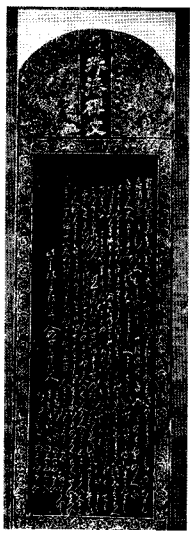
二　石門の西の碑の文のミセゼル

②とよみもり
③よそいもり
おくの　みよ
④くもことまりに
ま玉ばし
くにの　⑤またや
わたしよわちへ
⑥つかしよわちへ
⑦だしきやくぎ　つさしよわちへ
⑧あざかがね　とどめわちへ
みしまよ⑨ねん
みくによねん

その名の鳴り轟く杜
世を守護する杜
奥の澪
立派な泊に
真玉橋を
国の拠り所を
渡しなさって
掛けなさって
ダシキヤ釘を突き差しなさって
アザカガネを留めなさって
御島の世のためにも
御国の世のためにも

【解　説】　その名も高い、世を守護する杜・豊見城。その奥の澪・立派な湊に国を守る真玉橋を掛け渡しなさってある。ここに神が呪いのダシチャ木の釘を打ち込み、聖なるアザカ・ゲーンの束を結わえた。だから、この橋はこの沖縄の島・琉球の国の為に永遠に堅固である。

石門は首里城の正門である歓会門に向かって右側の場所です。尚真王時代の一五



＜真珠湊碑文＞
沖縄県立博物館蔵

---

②とよみもり＝鳴響み杜。その名も名高い杜。豊見城のグスクのこと。「とよみ」は鳴り響く、有名であるという意の動詞「とよむ」（鳴響む）の連用形。下に付く語を讃える。「もり」は一般に神のいらっしゃる聖なる森で、御嶽を表す。

③よそいもり＝世襲い杜。社会・国を守護・支配する杜。「そい」は、上から覆い守る、支配・守護するという動詞「おそふ」「そふ」（襲う）の連用形。くもことまり＝雲子泊。美しい港。立派な港。「くもこ」（雲子）は、美しい・立派、という意を表す語。

④また＝橋のことか。要害の地という説もある。

⑤⑥つかしよわちへ＝橋をかけまして、ということ。「つかす」の連用形。「よちわへ」は「～なさる」という意を表す尊敬・丁寧の補助動詞「おはす」の接続形。神が国王の行為を敬語表現した部分。

⑦だしきやくぎ＝ダシチャ釘。石垣を堅固にする呪的な釘。ダシチャは樹木名。シマミサオの木。邪悪なものを祓う聖なる力があると信じられた。

⑧あざか・がね＝植物で作った呪具。アザカはリュウキュウアオキ、ガネはススキ。方言でゲーン。いずれも邪悪なものを祓う力があると信じられ、これらを束ねて呪具とした。現在でもススキなどで作ったサンは用いられている。

⑨よねん＝未詳語。世のためにも、の意か。祈りの意。建造物の名とみられる例がある。

二二年、和冦などの外敵から国土を守る兵士たちの移動のため、国場川の河口部に真玉橋が架けられました。そのとき、工事の目的と竣工の儀礼が行われたことを記した碑が石門の西に建てられました(真珠湊碑文)。このミセゼルはその碑の文中に取り入れられた神の託宣の言葉で、橋が永遠に堅固であることを祝福する内容です。

2　大雨乞之時　仲里城にて御たかべ言

むかし　はじまり	昔の始まり
①きさし　はじまり	けさしの始まり
②あまみや　はじまり	アマミヤの大昔の始まり
しねりや　はじまり	シネリヤの大昔の始まり
③いしらご	石ら子に
ましらご	真石ら子に
④ざよく　めしやうろ	鎮座なさる
がけぢ　めしやうろ	鎮座なさる
⑤大なざ	大ナザ神
さだどのがなしに	サダ殿様に
御(お)みのけやべら	申し上げます
たるや　あらん	誰でもない
⑥そいきよらの　⑦おやのろ　おやぬし	ソイキヨラの親ノロ、親主が

① きさし＝昔。「むかし」の対語として用いられる。現在の方言でも以前とか、さっきというのをキサ、キッサなどという。日本語の「けさ」(今朝)も語源は同じ。

② あまみや・しねりや＝ニライ・カナイとともに、古い沖縄の他界観の一つであり、始源の世界・時間を表す語。沖縄の祖先神とされるアマミキョ・シネリキョと深い関係がある。

③ いしらご・ましらご＝石の子・真石の子。石の美称。方言で小石などのことをイシナグー(小石を使った女子の遊びもあった)というが、これは「石ら子」と同語。「ましらご」の「し」は「いし」(石)の縮(つず)まったもの。

④ ざよく・がけぢ＝「ざよく」「がけぢ」ともに語源は不明だが、鎮まってお座りになっていらっしゃる、ということを表す。

⑤ 大なざ・さだどの＝神の名。いずれも雨・水を司る神のようである。

⑥ そいきよら・みぜりきよ＝本来は神の名だが、ここでは神をまつる神女の名。

⑦ おやのろ・おやぬし＝親ノロ・親主。神をまつる神女の尊称。偉大なるノロ・親なる主、の意。

五の神	五の神と
七の神	七の神と
⑧みそで　あはせ	御袖を合わせ
こんで　あはせ	組手を合わせ
御みのけやべら	申し上げます
三か日では　とうさ	三日先といえば遠い
四か日では　とうさ	四日先といえば遠い
なまの　まひろまに	今の真昼間に
⑨まひつじに	真未の時に
雨　おろちいたまふれ	雨を降ろして下さい
⑩いぶ　おろちへたまふれ	水を降ろして下さい
大野原	大野原の
ひろ野原	広野原の
田数⑪	田ごとに
⑫まし数	枡ごとに
なか　もらちへ	田の中を盛り上がらせて
はた　よらちへ	端を寄らして
雨　ほらちへたまふれ	雨を降らせて下さい
いぶ　ほらちへたまふれ	水を降らせて下さい

⑧ みそで・こんで＝御袖・組手。「みそで・あわちへ／こんで・あわちへ」の形で、手を合わせて神に祈って、という意を表す。

⑨ まひつじ＝真未の時刻。昔は十二支で時間を表した。大まかには、未の刻は午後二時から午後四時の真昼間である。

⑩ いぶ＝水の古語。沖縄各地の方言でウブ。日本各地方言の水を表すオブなども同じ語。

⑪ 数＝「～のすべて」とか「～毎に」という意を表す接尾語。現代方言でも～カージと使われる。日本語の「数」からきた語。

⑫ まし＝枡。枡のように正方形・長方形などの四角い形をしたもの、ということで、田や畑をいう。「大枡・長枡」は田・畑を讃えた表現。

【解　説】　始源のアマミヤの昔・創世のシネリヤの太古の時に、聖なる石・真石の上に鎮まり、お座りになっておられる水の神様、大ナザ・サダドノ神様にお願い申しあげます。お願いいたしておりますのは他の誰でもありません。ソイキヨラの親ノロ・親主、ミゼリキヨの親ノロです。五柱⑬の神様・七柱の神様と共に御袖を連ね、手を組み並べてお願い申しあげます。今日から三日というのでは遅すぎます。これから四日の後というのでは間遠です。ちょうど今、未の刻である真昼間に雨を降らせて下さい。水を天から下ろして下さい。島の広大な野原にあるすべての田、畑という畑の真中を水で盛り上がらせ、端を水で一杯になるほどに、雨を降らせて下さい。水を下ろして下さい。

十八世紀初頭の久米島の仲里城⑭での大雨乞いの時のオタカベで、蛇体をした水の神（大ナザ・サダドノ）へ久米島のノロ（神女）が今すぐに雨をたっぷりと降らせて下さいとお願いしています。願意の表現は、ほぼ五音から十音の短い対語・対句を重ね、独特のリズム感を生み出しながら述べ立てられています。ほぼ同数の音の語の反復、同意義の語の繰り返しがリズムを生み、言語を非日常の言葉、すなわちハレの言葉＝詩にしていくことがわかります。

3　十月朔日　御竈廻の時の　御たかべ

①にるや	ニルヤ
かなやから	カナヤから
②おすではじまりめしよわちやる	お生まれ始めなさった
③石の　よらむさ	石のヨラムサ
④火神の　⑤おせぢがなし	火の神の御セヂ加那志様

⑬ 柱＝神・仏・霊を数えるときの接尾語（助数詞）。また貴人を数える時にも使う。

⑭ 仲里城＝久米島宇江城岳（三一二六メートル）山頂部に築かれたグスク。宇江城グスクとも言う。

① にるや・かなや＝古い沖縄の代表的な他界観の一つで、一般に海の彼方の理想郷で、万物の根元の地とされる。方言で、ニライ・カナイ、ニレー・カネー、ニール、ニッジャなどという。

② おすで＝御・スデ。「すで」は生まれる、孵化する、脱皮するという意の動詞「すでる」の連用形。「すでる」という語は、沖縄の古代的な想念のキーワードである。

③ 石のよらむさ＝石のヨラムサ。火の神の異称。「よらむさ」は「よらぶさ」とも言い、神の依り代を言うとされる。

[illegible]

あいちへ　なりめしよわちへ　　柜手になりなさって

火　　火

⑦まつ　　まつ

のふ事も　⑧百(もも)がほうの　あるやに　　何事も百果報があるように

御守(おまもり)めしよわちへ　　御守りなさって

御たぼへめしよわれ　　下さい

【解　説】　ニライ・カナイでお生まれになられた石のヨラムサ・火の神様は、⑨聞得大君御殿(きこえおおぎみうどん)の下座敷に祀られております三つ石の火の神様のお相手になり、もろもろの火につきましてすべて災いが無く、幸せだけがありますようにお守りなさって下さいませ。

南国沖縄も旧暦十月の頃からは北からの季節風が続き、火に親しむ季節となります。そのため十月朔日には「火の用心」の儀礼が沖縄の各地で行われました。これがカママーイ（竈廻り）です。

このオタカベは首里城での儀礼の時に火の神に捧げられたもので、火の神の聖なる出自を讃え呼びかけ、首里城に祀られている火の神様とともに火難がいっさい起こらず、ただ幸せごとだけが続きますようにと祈願しています。オタカベの構造としては祈願の対象への呼びかけと願意の表現だけの単純なものです。

[illegible]

家の竈(かまど)（現代ではガスコンロの後方などの上）に祀(まつ)られ、一家を守護する。一家の主婦が司祭となって祀る。古くは人間の願いを上位の神に伝える役目を負う神であったが、中国の道教の影響を受けて、現在見るような神となった。石を鼎型(かなえがた)に置いて神体とする。

⑤おせぢがなし＝御セヂ加那志。「御霊力様」が直訳。セヂは「不可視の霊力」と言われ、これが人間や動物に付くと、その人や物は霊力を有する存在に成り変わるという。「がなし」は、尊敬・敬愛などの意を表す接尾語。語源は古語の「かなし」（愛し）。

⑥三つ物がなし＝火の神の異称。「みつもの」は火の神を表す鼎型に安置された三つの石。

⑦まつ＝火の忌(い)み言葉。祭礼の時に使われる聖なる語。

⑧百がほう＝百果報。たくさんの幸せ。

⑨聞得大君御殿＝琉球国の最高位の神女である聞得大君の邸宅（御殿）。神殿には火の神が祀られていた。



＜火の神＞

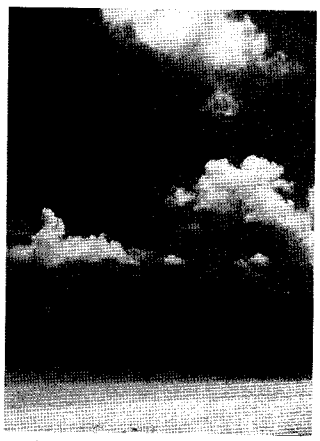
4　ハブグチ

①あやきまだらきや　　綾黄マダラキは
こーじり　まーらば　　私が川尻を廻る時には
こーがしら　まーてぃ　　ハブは川頭を廻り
こーがしら　まーらば　　私が川頭を廻る時には
こーじり　まーてぃ　　ハブは川尻を廻って
いきちげ　やりちげ　　行き違い　遣り違いさせて
いきゃわんにし　　行きあわないようにして下さい
②とーとん　　尊

【解　説】　美しい黄マダラキなるものは、私が川下を歩き廻るときは川上を廻り、私が川上を歩き廻るときには川下を廻って、私と行き違い・すれ違いで、出会わないようにして下さい。ああ、尊の神様、お願いします。

奄美大島北部の笠利町佐仁に伝えられるハブ除けの呪文です。命に危害を及ぼすハブの害に悩まされた奄美の人びとの切なる思いの凝縮されたマジナイの言葉です。ハブグチは奄美各地に伝承されており、呪文というものが人びとの生活といかに深く関わっていたかが知られます。

ハブを「あやきまだらき」と称しているのは、ハブと言うと、ハブそのものが出現するという言霊信仰によるものです。「美しい黄色まだら模様のモノ」とハブを美称しているところにもハブを忌避する心持ちがあらわれています。沖縄ではハブをナガムン（長い物）などと言っています。



＜枝手久島＞
奄美におけるハブ発祥の地という伝説がある。

①　あやきまだらき＝ハブの忌み言葉。「美しい黄色のまだら模様のもの」が直訳。忌避されるものはその名で直接呼ばない。

②　とーとん＝尊い。神に対して呼びかけるときに発する感動詞。語源的には沖縄各地方言でウートートゥ、トートーメーなどと言うときのトートゥ、トートーと同じ。

仁王ノロ

②うぬとうりぬ　ねぃぶに　　鵜の鳥の喉に

③はし　かけてぃ　　橋をかけて

あさされぃば　いじれぃ　　喉にかかった魚の骨は、浅ければ口に出よ

ふかされぃば　うてぃれぃ　　深ければ下へ落ちよ

【解　説】 鵜の鳥の喉とこの子の喉に橋を架け、この子の喉は鵜の鳥の喉と同じようにしてあるよ。さあ、喉にかかった骨は、浅いところにあるのなら口から出てこい。深いところにあるのなら喉から落ちて下って行け。

奄美大島に伝わる、喉にかかった魚の骨を取り・落とすときのマジナイの言葉です。鵜は呑み込んだ魚をそのままの形で吐き出します。このことから、鵜の喉が広くて物の出し入れが自由だ、とみたのでしょう。この鵜の姿にならって、喉にかかった魚の骨が早くはずれて口から出てくるか、落ちてしまうかしてくれと、呼びかけているのです。

発想的には「痛いの痛いの飛んで行け」などの呪文に通じるものですが、鵜の鳥の喉と魚の骨のかかっている人間の喉に橋をかけることによって両者が同一のものとなるとする④感染呪術的なところが特徴的です。

---

②うぬとうり＝鵜の鳥。

③はし　かけてぃ＝橋をかけて。ここでは「鵜の喉と人間の喉とに橋をかけて」ということで、人間の喉を鵜の喉のようにしての意。

④感染呪術＝呪術の考えの一つ。接触呪術ともいう。ある属性や能力などを有するものと一度接触するとその属性・能力などがこちら側にももたらされるという考え。

3　オモロ

沖縄の古典文学を代表するものが『おもろさうし』です。

オモロは、グスク時代①ないしはそれを若干遡る時代から奄美・沖縄の各地で謡われていた歌謡で、本来は神を祀る祭祀の場で、神女たちを中心として謡われた祭祀歌謡②です。これが首里王府の公式行事（おもろ主取④）の管掌するところとなりました。現在音曲として伝えられているのはそうした王府における男性歌唱者の謡ったオモロです。これを首里王府が十六世紀以降に収集し、本として編纂したのが『おもろさうし』です。

『おもろさうし』は全二二巻で一五五四首のオモロが収められています。原則として各巻には表題と編纂年が記されています。それによると第一巻は一五三一年、第二巻は一六一三年、第三巻以下が一六二三年に編纂されています。『おもろさうし』はほとんどが平仮名書きで一部、簡単な漢字が用いられています。「一」と記してオモロの謡い出しを示し、「又」で旋律の繰り返し（「節」＝「番」の改まり）を示しています。

オモロの種類については表題を手がかりに八つに分類する仲原善忠⑤の考えと、それに基づきながらも、王府を中心として謡われた「王府オモロ」、地方のことを謡った「地方オモロ」、その他の「特殊オモロ」にわける外間守善⑥の考えがあります。今後、内容をより綿密に把握したうえであらためて分類する作業が待たれます。

内容は、神を祀る祭祀を謡うもの、御嶽⑦を讃えるもの、王や按司の居城を讃えるもの、交易や戦

---

① グスク時代＝沖縄歴史の時代区分の用語。十～十二世紀に始まり十四世紀に至る画期的な時代をさす。この時代は各地で按司によってグスクが造られ、交易や戦闘などの活動が行われた。

② 祭祀歌謡＝歌謡分類上の術語。祭祀の際に御嶽などの聖域で神役・祭祀集団によって謡われる。神・祭祀・聖域を讃えるもの、祭祀の模様を叙述するものなど、内容はさまざまである。沖縄の歌謡を特徴づけるジャンルである。

③ みおやだいり＝首里王府の行う公式行事。役人・人民が勤める公務。語源は「御親内裏」で、「御」も「親」も尊敬・美称の接頭語。「内裏」は天皇・王のいらっしゃる空間、すなわち宮中をいう。ここでは国王が政務を摂る首里城。転じて王府の行う政治公務をいう。沖縄方言でメデイ、ウェーデー、八重山方言でオーデーラなどという。

④ おもろ主取＝首里王府でオモロを管掌した役職名。王府では『おもろさうし』第二二巻の「みおやだいりのおもろ」四七首を諸儀礼の時に謡った。オモロ主取を筆頭にして六～八人のオモロ親雲上・オモロ勢頭がいた。

⑤ 仲原善忠の分類＝仲原善忠（一八九〇～一九六四。久米島出身の地理・民俗・歴史学者）の『おもろさうし』の表題による分類。地方オモロ、ゑさオモロ、ゑとオモロ、こねりオモロ、あすびオモロ、名人オモロ、神女オモロ、公事オモロ。

[redacted]ています。事績を書き事業・記録を手にすることで、転載・二次生産を手にすることができるようになっていますが、恋を内容としたオモロは少なく、死を謡ったオモロはありません。オモロに登場する地名は京都・鎌倉・筑紫から奄美の島々、沖縄本島とその周辺の島々、宮古・八重山、唐（中国）・南蛮（東南アジア諸国）と広範囲です。わたしたちの祖先はこれらの広大な地域を活動の場としました。そのことがオモロに謡われています。

オモロは古い時代の琉球の社会・言語・宗教・民俗・歴史を知る上で不可欠のものです。沖縄の文化研究のバイブルと言われるゆえんです。

1 天に鳴り響く大主よ
〔明けもどろの花が
東の空一面に咲いていく
あれ！　見ろよ！
なんて美しい〕
2 天地に鳴り響く大主よ
（〃）部繰り返し）

①打出では　日の鳥の節
一　②天に鳴響む大主
③明けもどろの花の
咲い渡り
あれよ　見れよ
④清らやよ
又　地天鳴響む大主
（七巻三七九＝十三巻八五一）

【解　説】 天地を支配する太陽を讃美した古謡。東の空に神々しく現れた太陽への感動が伝わります。光の渦となった夜明けの太陽を「明けもどろの花」と表現し、感動を「あれよ　見れよ　清らやよ」と一気に歌い上げたオモロ時代の人びと。変化に満ちた雄大な太陽は、生命を支配する荒々

[redacted]（一九二三―　）[redacted]沖縄文化に[redacted]究（沖縄学）を代表する学者。金田一京助・仲原善忠・服部四郎に師事。国語学・方言学・オモロ研究を深める。『おもろさうし辞典・総索引』『南島歌謡大成』（全五巻）『定本おもろさうし』『定本琉球国由来記』などの著作がある。

⑦ 御嶽＝沖縄の固有信仰の中核をなす聖域。神が鎮まる杜。奥に聖域中の聖域とも言うべきイベがあり、神体の石や香炉のほか聖木が生えている。ここで神への直接の祈願がなされる。イベには女性の神役しか入れない。

① 打出では　日の鳥の節＝「歌い始めは日の鳥」の意。節（旋律）は不明。

② 天に鳴響む大主＝「天に鳴り響く大主」の意で、太陽を擬人化。

③ 明けもどろの花＝多彩に放射する日の出の光景の美しさを「花」と比喩表現。

④ 清ら＝「美しい」の意。古語「清ら」に同じで、第一級の美をいう。

しくも美しい偉大な神でした。ここでは太陽を「大主」（王、領主、支配者）と擬人化していますが、十五巻一一〇三のオモロでは「宜野湾の太陽の」と領主的人物が「太陽」と称して豊作の予祝を行っています。

オモロ時代の人びとにとって、太陽は生活全般を支配する偉大な自然そのものでした。だからこそ素直に自然の美や威力を認め、その力を自分たちの生活に取り入れることを真剣に願いました。そして同時に太陽への崇拝は権力者を讃美する事と重なっていきます。

この歌は、「一」の部分と「又」の部分が対句で、その下に繰り返しの句があります。これがオモロで多い歌形です。繰り返しの句「明けもどろの花の　咲い渡り　あれよ　見れよ　清らやよ」が感動の中心です。

一　ゑけ①　上がる三日月や
（又）②　ゑけ　神ぎや③金真弓④
又　ゑけ　上がる明星⑤や
又　ゑけ　神ぎや⑥金細矢
又　ゑけ　上がる群れ星や
又　ゑけ　神が挿し⑦櫛
又　ゑけ　上がる⑧虹雲は
又　ゑけ　神が愛⑨きき帯

（十巻五三四）

1　おお、天空に上るあの三日月は
2　まるで　神の持つ立派な弓のよう
3　おお、空に輝くあの明星は
4　まるで　神の持つ立派な細矢
5　おお、空で瞬くあの群れ星は
6　まるで　神が挿している美しい櫛のよう
7　おお、空にたなびくあの虹色の雲は
8　まるで　神が身に纏う美しい帯のよう

①　ゑけ＝囃子言葉、掛け声。現代方言のアキサミヨーのアキに通じる感動詞。
②　（又）＝この節は一節の述語部分。又記号が欠落していると考えられるので補った。
③　ぎや＝格助詞「が」（の）と同じ。
④　金真弓＝立派な弓のこと。金は美称。
⑤　明星＝金星のこと。宵の明星、明けの明星。
⑥　金細矢＝立派な細い矢。金は美称。
⑦　挿し櫛＝髪に挿す櫛。
⑧　虹雲＝夕映えで虹色に輝く雲。虹は現代方言でヌージという。
⑨　愛きき帯＝大切にしている帯。「きき帯」は帯のこと。方言でチチュビという。



＜明けもどろの花＞

【解　説】　ふと見上げた夜空の美しさに心を奪われた経験は誰にもあるでしょう。それはそのまま古代人のオモロ時代の人びとは天体をどのように見ていたのでしょうか。

このオモロは、海上で見上げた夜空の美しさを謡ったもので、「ゑけ」という感動詞が印象的に繰り返されています。「ゑけ」の後には、夜空に浮かび上がる月や星そして雲の美しさが、雄大な比喩を伴って表現されています。三日月や金星を神の持つ弓矢、群星を神の美しく輝く櫛、そして絹のように薄くたなびく雲を神の帯と讃美した瞬間、夜空は神の住む荘厳（そうごん）な世界に変わるのです。

このようにひたすら神を讃美した人びとにとって、穏やかな天候は航海の成功を約束しました。天体の美は言葉となって発せられ、神へ捧げられます。こうして祭礼の場で神を讃美することが、航海の安全を祈願することになるのです。必死に航海の無事を願う私達の祖先にとって、「ゑけ」という言葉は星空の美しさを讃美するだけではなく、祈りへ転じて行く深い感動の言葉だったのでしょう。

この歌の表現形式は、一・二、三・四、……と二節で主語・述語関係をつくり、それを繰り返していくものです。対句と「ゑけ」のあとに続く八・八調の反復が歌全体をリズミカルで軽快にしています。

首里（しょり）ゑとの節

一　①真南風（まはえ）鈴鳴（すずな）りぎや
　　②真南風（まはい）　③さらめけば
　　④唐（たう）　南蛮（なばん）
　　⑤貢（かまど）　積（つ）で　⑥みおやせ
又　⑦追手（おえちすず）鈴鳴りぎや

1　真南風鈴鳴りが
　真南風が吹きだしたら
　〔唐や南蛮の国々から
　貢物を積んで帰り、国王へ献上せよ〕
2　追手鈴鳴りが

①　真南風鈴鳴り＝船名。真南風のスズナリ。「鈴鳴り」を讃えた語。
②　真南風＝南から吹く風を讃えた語。
③　さらめけば＝吹きだすと。「さらめく」は風がさらさらと吹く。
④　唐・南蛮＝中国（唐）や東南アジア。
⑤　貢＝王への献上品、貢物。
⑥　みおやせ＝差し上げよ。「みおやす」は献上する。
⑦　追手鈴鳴り＝船名。追手風のスズナリ。

⑧追手（おあぢへ）　さらめけば

（十三巻七八〇）

追手の順風が吹きだしたら

（一）部繰り返し）

【解　説】夏の訪れとともに、沖縄の島々には南の風が吹き、異国へ貿易に行っていた交易船が帰ってきます。海の向こうにはニライカナイという豊かなところがあると信じていた沖縄の人びとは、帰りの船が待ち遠しくてたまりません。けれども航海には危険も多く、古（いにしえ）の人びとは、舟人の無事をただ祈るしかありませんでした。このオモロが謡われると、大きな交易船や異国から届いた珍しい品々、そして生命力溢（あふ）れる夏の季節が、豊かで満たされた映像となって人びとの胸に広がっていきます。今年も「真南風鈴鳴り」や「追手鈴鳴り」というゆかしい名を持つ船が、やがて吹く南風とともに帰国するはずです。

繰り返し部分の「唐　南蛮　貢　積で　みおやせ」は強い命令ですが、同時に人びとの強い願いでもあります。このオモロの謡われた時代は、願いを現実のものにしようとする人びとの切実な心とともに、言霊（ことだま）が生きていた時代でした。

①浦白（うらしろ）　立（た）ちよい節

一　②百名（ひゃくな）　浦白（うらしろ）　吹（ふ）けば
　　③（わかきみ）うらうらと　④若君（わかきみ）　使（つか）い
又　⑤我（わ）が浦（うら）は　浦白　吹けば
又　⑥手数（かず）は　⑦蒲葵（こば）の花（はな）　⑧咲（さ）き居（よ）ら
又　櫂遣（かいや）るは　波花（なみはな）　咲き居ら

1　百名の浦にさわやかな南風が吹くと
〔穏やかに若君神（わかきみがみ）をお迎えしよう〕
2　我が浦にさわやかな南風が吹くと
（一）部繰り返し）
3　船を漕ぐたびに、蒲葵（クバ）の花が咲きこぼれるようだ
（一）部繰り返し）
4　櫂で漕ぐたびに、波の花が咲きこぼれるようだ
（一）部繰り返し）

---

①浦白立ちよい節＝浦白は吹いていての節。「浦白」は梅雨明けの南風。白南風。

②百名＝玉城村百名。重要な聖地があり、美しい砂浜で知られる。

③うらうらと＝穏やかに航海して。のどかに。

④若君＝神の美称。若々しい君神。君は神のこと。

⑤我が浦＝ここでは、百名の対語。「うら」は集落のこと

⑥手数＝船を漕ぐたびに。

⑧追手＝追い風、順風のこと。「ちへ」は「て」（手）の口蓋化（こうがいか）した形。

一 謝名思ひや
誰が 生ちやる子が
此が 清らさ
此が 見欲しや 有居るな

又 百ぢやらの
あぐで居ちやる庫下口
謝名思いしゆ 開けたれ

又 謝名思いが
謝名上原 上て
蹴上げたる露は

1 謝名思い様は
誰が生んだ子か
こんなにも美しく
こんなにも見たいことよ

2 たくさんの按司が
開きあぐねていた宝物庫の扉を
謝名思い様こそが開けたのだ

3 謝名思い様が
謝名上原に上って
蹴り上げた草の露は

【解 説】 梅雨あけに島々を吹き抜けるさわやかな南風。百名の白い浜辺の向こうには聖地久高島が見えます。そして、そののどかな景色の中に君神を乗せた舟が、ゆったりと穏やかに走っていきます。「舟を漕ぐたびに立つ波しぶきがなんて美しいの。この波は、あの久高島の聖地に咲く小さな黄白色の蒲葵の花が、咲きこぼれているようだ。」と歌った瞬間に、古代の人びとは、蒲葵の樹々に囲まれた聖地の霊力に包まれたことでしょう。

このオモロでは、白い南風・白い花・白い波の表現が、私達に初夏のさわやかさを運んできます。しかし、古代の人びとの心に映るこの穏やかな光景は、祈りを伴った厳粛な世界でもあったのです。

二 巻一二三、一二巻一二二、

⑧ 蒲葵＝種類名。中国原産。葉は扇状で、[ ]、三四、(三巻二、[ ]三)に黄白色の小さな花が咲き、小粒の花がほろほろと散っていく。本文、一二五八番では「蒲葵花」。咲き居ら＝咲いているようだ。本文、一二二八番では「咲き清ら」。


<蒲葵の花>

① 謝名思ひ＝中国との交易関係を開いた察度王のこととされる。現在の宜野湾市宇地泊から大謝名・真志喜・大山一帯の実力者で、鉄の農具を農民に提供し信望を集めた。

② 清らさ＝華やかで美しい。「きよら」は奄美・沖縄本島周辺で用いられる。

③ 有居るな＝あることよ。「な」は感動を表す終助詞。

④ 百ぢやら＝「百」は多くの数。「ぢやら」は勝れた人の意で、按司の同義語。

⑤ あぐで居ちやる＝開きあぐねていた。「あぐで」は原典では「あらて」であるが、通説に従った。

⑥ 庫下口＝房屋の入口。ここでは宝物庫の扉のこと。

⑦ 謝名上原＝「謝名」「上原」どちらも地名。謝名の隣の上原のこと。現在の宜野湾市大謝名付近か。

露⑩からど　香し⑪や　有る

（十四巻九八二）

露でさえもよい香りがする

【解　説】　十四世紀の中頃、「謝名思い」という一人の若い英雄が現れました。彼は、現在の浦添市伊祖一帯を治め浦添城を居城にしていた英祖（一二二九～九九）の子孫に代わって按司となり、察度王と称しました。沖縄で初めて中国（明）と朝貢関係を結び、鉄製の農具などを輸入したのが謝名思い（察度）です。鉄製の農具は農業の生産性を飛躍的に高め、人びとの生活は豊かになりました。こういう若くて偉大な人物に対して、「なんて気高い人だろうか。ひと目でも拝見したい。」と願う素朴な憧れと讃美の気持ちが、このオモロには謡われています。こうして、英雄の一挙手一投足が人びとの賞讃の的となり、ますますその名が高まっていくのです。

阿嘉の子が　能くも　又もが節

一　①勝連わ　何にぎや　響ゑる
　　大和の　②鎌倉に　響ゑる
又　③肝高わ　何にぎや

（十六巻一一四四）

1　勝連の地は何に響えようか
〔大和の鎌倉に響えるのだ〕
2　肝高の地・勝連は何に響えようか
（一）部繰り返し）

【解　説】　十五世紀半ば、勝連半島に阿麻和利と名乗る英雄が出現しました。阿麻和利は首里王府の正史『球陽』には逆臣と記載されていますが、「住民を圧政で苦しめていた勝連按司茂知附を破り、**良港に恵まれた勝連を発展させた偉大な按司**」との言い伝えも残っています。

⑧　上て＝上って。高い所に上り国見をするのは、政治的実力者（王）の示威行為。謝名思い（察度）が実力者であることを示している。
⑨　露＝はかなく消えやすいのが露だが、ここでは生命力あふれる英雄が触れたことで、香り立つみずみずしいものとして表現されている。
⑩　からど＝からでさえも。「ど」は強意の係助詞。
⑪　香しや＝よい香りがする。謝名思い（察度）の人格的な気高さをしめし、讃美している。

①　勝連＝現在の勝連町。勝連城がある。ここを居城とした阿麻和利は、勝連按司として領地の人びとの信望を集めた英雄。
②　鎌倉＝現在の神奈川県鎌倉市。源頼朝が鎌倉幕府を開いた。一一九二～一三三三年の間の政治・文化の中心地。
③　肝高＝勝連の美称。志があり、気高いこと。勝連の対語として使われる。勝連城内三の郭の一角に「肝タカノ嶽」がある。

このオモロで謡われている「大和」・「鎌倉」などの北方（日本）とも交流し、多くの富が集まったことでしょう。やがて阿麻和利は中城城主の護佐丸をも破り、勢いが盛んになってきました。しかしそのことが尚泰久王（一四一五～六〇）の権力を脅かす行為となり、首里軍の攻撃を受けました。その逆賊であるはずの阿麻和利が、首里王府の編纂した『おもろさうし』には、歴史上の英雄として数多く登場します。一四五八年、首里軍に滅ぼされた勝連の英雄は、「肝高の阿麻和利」としてオモロに謡われ、今でも勝連の人びとに親しまれています。

米須世の主の節

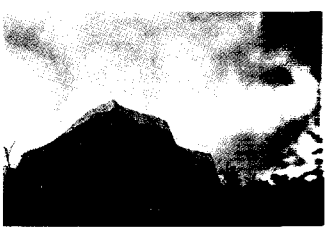
一 勝連まみにやこは ②やておちへ
又 ③中百名こみなこは やておちへ
又 昼なれば 肝 通い 通て
又 夜なれば 夢 通い 通て
又 西道の ④謝名道る 行きやしゆ
又 東道の ⑤屋宜道る 行きやしよ
又 東道い 屋宜の思いぎや 待ち居り
又 西道や 謝名思いぎや 待ち居り
又 いぢや ⑥屋慶名中道ぢよ 行きやしよ

（十四巻九九六）

1 勝連マミナコに心を通わせて
2 中百名コミナコに心を通わせて
3 昼になると恋しい思いを通わせ
4 夜になると夢路に心を通わせ
5 西道の謝名の道を行こうか
6 東道の屋宜の道を行こうか
7 でも、東道には屋宜の恋人が待っている
8 でも、西道には謝名の恋人が待っている
9 それなら、屋慶名の中道を行こう

【解　説】 これは、恋を主題にした数少ないオモロのひとつです。内容は、「勝連の中の平安名に住

① まみにやこ・こみなこ＝ともに女性の名。
② やておちへ＝心を通わせておいて。
③ 中百名＝地名。「ひゃくな」は「へんな」の古形であろう。中の平安名。
④ 謝名＝地名。現在の大謝名・真志喜・大山一帯。
⑤ 屋宜＝地名。現在の中城村屋宜。
⑥ 屋慶名＝地名。現在の与那城町屋慶名。


＜勝連城跡＞

む乙女に恋心を抱いた若者が、夜も昼も恋焦がれている。」ことを、対句を連ねて謡っています。恋しくて、一刻も早く娘の所へ通いたいのですが、その途中には疎遠となった娘たちの住む村があります。どうしたものかと考えて、「そうだ。あの屋慶名の中道を通っていこう。」と、ひらめいたのです。めでたし、めでたし。

恋の成就に悩む若者が謡われてはいますが、女性の側から見ると、ずいぶん勝手です。一人の若者の真剣な恋の歌ではなく、集団の場で笑いを伴って謡われたオモロかもしれません。一説では、古代社会の歌垣のような男女が集う「遊び」の場で謡われ、唱和されたとも考えられています。

4　奄美の歌謡

奄美諸島の歌謡も沖縄・宮古・八重山の歌謡と同様に呪祷的歌謡、叙事的歌謡、抒情的歌謡のすべてのジャンルが備わっています。その中で、よく知られたものに叙事的歌謡に分類される「ながれ歌」があります。「ながれ」の意味は、「流れ」とも「長音」ともいわれますが、対語・対句を繰り返し、流れのように歌が連続することに由来するのでしょう。この「ながれ歌」には「米ぬながね（れ）」のような不定形の叙事的歌謡や、「月ぬながれ」②「風ぬながれ」③のような琉歌調の抒情歌があります。本書では「芭蕉流れの歌」を収録しました。古い不定形の「芭蕉ながれ」は呪的な力を感じさせ、ユタと呼ばれる民間巫者④が儀礼を行う際に謡ったといわれますが、新しい「芭蕉流れの歌」はリズミカルな美しい詩になっています。

また、「あさばな節」も奄美の歌謡として広く知れわたっています。祝い事や人びとが集まって宴

---

① 米ぬながね（れ）＝米の出自及び栽培過程などを謡ったもの。
② 月ぬながれ＝美しい月への願い事や月夜の恋を歌ったもの。
③ 風ぬながれ＝風と恋とを絡めて歌ったもの。
④ 巫者＝神がかりの状態で神霊・死霊と接触し、託宣・占い・病気治療などを行う宗教的職能者。